森の木魂（こだま）

2022 年 4 月 24 日発行　第 6 号

もくじ

・巻頭　奥山も豊かな森にしたい…… 1
・脱炭素社会の課題を考える 3.26 シンポジウム …… 2
・今夏から「どんぐりゼミ」を開催します …… 4
・今年から「りんねの森づくり」を始めます …… 5
・日常の生活に活かす"森と暮らす心得"…… 6
・大雨や木々の悲鳴に鐘を鳴らし続けていきたい ……7
・生存を危機に陥れる紛争や気候危機と向き合う生活 ….8
・生物社会での人間の位置を知る……9
・シニア世代の活動が飛躍できるファンクラブへ再出発……10
・"山は生きている"　足尾銅山労働者の心を支え……11
・森は友だち・編集後記……12

奥山も豊かな森にしたい

私は自分の眼で確かめることをモットーとしており、植生を学び始めてからも現場主義を取れたのは、宮脇先生のお陰であったと思います。また、チュクセン先生(師であるドイツの植物生態学者)からも「論文は一人の目を通した見かたでしかなく、現場の自然をよく観察することが大事です」と言われました。日本列島を琉球から利尻、礼文まで踏査し、海岸から高山まで植生調査を行い、なぜ、そこにその植物が生えているのか、自問自答を繰り返してきました。一つの種子が散布され、発芽、生長、開花、結実という生活史には土壌、日射、周囲の植物との競合、土壌動物、昆虫や鳥との極めて複雑な関係があり、その存在を科学的に証明するのは不可能でも、存在を理解することはできるわけです。植生への理解を深めようと日本列島から中国の華東地域、韓国、ロシアの樺太、カムチャツカから沿海州、東シベリア、太平洋を挟んで北米西部の植生を足で稼いで見て回りました。結論から言いますと、知識を広げたというより、深めたという感じです。田んぼや路傍の雑草群落でも、どのような環境下で成立しているのか、また、どのような植生に移り変わっていくのか、分かるようになり、植生の成立に偶然は無いと思えるようになりました。

日本列島の周囲を見て、改めて日本の植生は多様であり、気候変動にも対応できる植生がしっかり残されていると確信しています。草本層、低木層、亜高木層、高木層に種が充満する多層社会の広葉樹林で、亜熱帯から冷温帯まですべて覆われていたのが、拡大造林とニホンジカおよびエゾジカによる食害でだいぶ損なわれてはいますが、各地に残されている自然植生を元手に復元できると考えています。

長い時間をかけて培われた自然植生は多様な生物種を伴い、安定した生態系を構築しています。太陽エネルギーをもとに物質循環が滞りなく行われて、水源涵養、水質浄化、大気浄化の機能を果たし、環境の変化にも強い植生ですから、炭酸ガス固定以外にもたくさんの働きをするわけです。本来、スギ、ヒノキは渓谷などの急峻な露岩地に成立する土地的な極相林で、面積的に限られた植生なのです。スギ、ヒノキは林業にとって大事な種ですが、回収の難しい路網整備も大変な山奥の人工林は広葉樹林に戻すべきと考えています。あるいは砂防効果が期待される畦畔域でもシオジ、サワグルミ、トチノキなどの崩壊に強い広葉樹林に戻すべきでしょう。バランスの取れた国土保全を進めるために広葉樹林化は必要です。植林内にその土地に合った潜在自然植生の構成種を植えて、スギ・ヒノキの収穫後に徐々に広葉樹林に戻す作業もしてみたいですね。

代表　中村幸人

事業報告

脱炭素社会の課題を考える３・２６シンポジウム

3 月 26 日、「脱炭素社会の課題を考える 3.26 シンポジウム」をオンライン形式で開催しました。お陰様をもちまして、総勢 100 名を超える方に視聴していただきました。ここでは、その概要をお伝えいたします。

●代表挨拶

開会にあたり、主催者の中村代表は、温暖化防止対策は自然界の吸収量を増やしていくことの重要性、ウクライナへ軍事侵攻したロシアの暴挙は許せない旨を挨拶で述べました。

●第一部・基調講演

第 1 部の基調講演は、国立環境研究所地域システム副領域長の江守正多さんから「気候危機のリスクと社会の大転換」というテーマでお話を頂きました。講演内容は、別冊にて会員へ配布します。

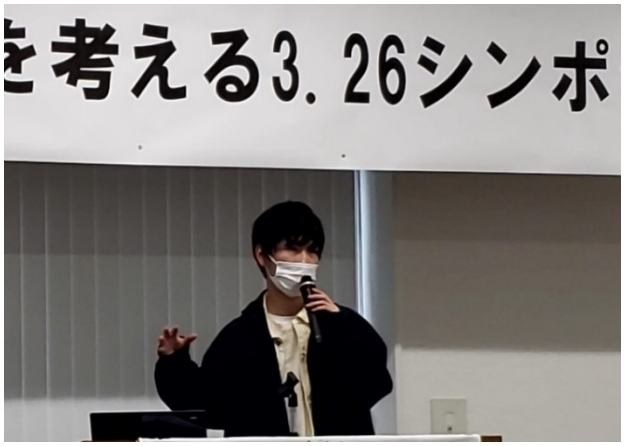
●第二部・活動報告１

第 2 部では、2 つの活動報告と活動提案が行われました。

最初は、林野庁職員の古賀さんと宇佐見さん。二人は、「森林×SDG s プロジェクト」のメンバーで、2 年前に「幸せな未来に向けた 5 つのアクション」をまとめたコンセプトブックを制作しました。このアクションは、森林や木材を活用する企業へのヒアリングを行い、地方創生、脱炭素、メンタルヘルス、働き方改革等の社会課題をも考慮し、より良い未来を実現するために、森や木とどのように関わっていったらよいかを考えて完成させました。また、二人からは、"森を知る・学ぶ"、"森の恵みを楽しむ"、"森や木に触れる"アクションの紹介もありました。

●第二部・活動報告２

二人目は、学生の井上さん。彼は、スウェーデンの環境活動家・グレタトゥーンベリさんが起こした気候変動の解決に向けたムーブメント Fridays For Future （FFF）の東京支部を 4 年前に立ち上げました。主な活動は、グローバル気候マーチ（デモ）を行い、気候変動の解決に向けて声を上げるアクションでした。他にも東京都への署名の提出、学生気候危機サミットの開催等を行ってきました。1 年間ほどの活動は楽しかったのですが、活動がストライキや署名がメインであり、影響力が大きかったとはいえ、活動は限られた層に留まり、デモの悪いイメージが広がることや、自分の意志や自分らしさが反映できないといった点から、FFF からいったん離れました。現在は、ウェルビーイング（幸福で肉体的、精神的、社会的に全て満たされた状態）に過ごしたいと発起し、都市の遊休地やビルの屋上など都市の隙間を活用し共同で野菜や果物を育てる農的活動（アーバンファーミング）に携わっています。4 月からは大学院に通いながら、地球環境と豊かな人間関係を再生させる活動を続けていくそうです。



●活動提案

最後は、当会の政治アドバイザー・山崎誠衆議院議員より、「木を植える国民運動を推進する基本法」の素案が提案されました。その核心点は、林野庁が打ち出している１億本の植樹を実現する国民運動を成功させていく具体案です。内容は、放棄地や休耕地等で植樹をして欲しい土地所有者や、植樹をして欲しい企業を募り、公共地を含めた植樹地を植樹ボランティアへ公表し、苗木や植樹地の整備を国が整え、いつまでに植樹を完了させる覚書を締結するといったものです。また、この運動に協力するボランティアには「エコ休暇」（仮称）を与え、協力した土地所有や企業にはメリットを還元するなど、安心して仕事を休んでボランティア活動ができる環境を整えるとし、教育に関しては、児童から学生の授業では森づくりを組み込んだカリキュラムを作成し、森から学び、森と育つ、森と共に生きる日本人の森の文化を育むとしています。山崎政治アドバイザーは、この法案を国民と共に豊富化し、脱炭素社会づくりのひとつの柱にしたいと訴えていました。

●アクションプランの提案

シンポジウムのまとめとして、井上運営委員より森びとが考えるアクションプランが提案されました。

はじめてのオンライン形式の開催でしたが、シンポジウムは多くの視聴者の皆さんに支えられ、脱炭素社会の課題が見つけることができました。温暖化防止は待ったなし！ですので、シンポジウムで出会えた皆さんと共に、各地域で課題解決に向けた活動をつくりだしていきたいと思っています。皆様のご協力に感謝申し上げます。

運営委員　小林敬

森びとが考えるアクションプラン

1．毎月、1 日はエネルギーについて考える日とし、ネオンの消灯日を設ける。また自動販売機の稼働制限やノーカーデーの実施を社会に提案する。

2．10 年間で 1 億本の木を植える国民運動への要望書（フィールドの確保、企業や森づくりサポーターの呼びかけ、各地の植樹本数の合計で 1 億本の植樹を実現等）を提出する。

3．育樹活動では雇用の確保をし、3 年間の下草刈り等の森の管理のボランティアでは「エコ休暇」（時限立法）を実現させ働きかけをする。

新事業

あらためて「森」を学びませんか？今夏から「どんぐりゼミ」を開催します

■森びとが都会でゼミを開く意味

今、世の中では「持続可能な社会」が大きく取り上げられています。次の世代がつつがなく生活できるように、との意味ですが、その基盤である自然環境についてはあまり熱心に語られているようには見えません。

「持続可能」の最大の敵の一つが「気候変動」です。その原因、二酸化炭素を吸収する森林をまもり増やすことは、その対策として非常に有効であり、かつ意味があるのは誰もが知っていることですが、その機運が高まることがないのは何故でしょう。

逆に聞こえてくるのは、「モニターを見る邪魔になるから伐っちゃうよ」（代々木公園）、とか、「再開発するから古い木をざっくり切り倒しますね。花が咲くきれいなやつ植えるし周辺も新しくなるんだからいいでしょ」（神宮外苑の森）といった残念なニュースばかり。これだって大きな公園だからニュースになるのであって、似たようなことは日本の至るところで起きているように思います。

多様性や命の尊さといった言葉やイメージは先行するものの、どうも世の中の流れとしては、あくまで自然を軽んじる方向に進んでいるようにしか見えません。その原因の一つは、自然とは全く触れずに生活できてしまう私たちの都市中心のライフスタイルにあります。知らないことに対して無関心になるのはある意味当然かもしれません。ただ、そのことが「気候変動」といった問題を助長させているのではないでしょうか。

多くの識者は、すでに「気候変動」は個人がどうにかできるレベルを超越していると言っています。問題のほとんどは、化石燃料を扱う国家や企業であって、世の中の仕組みをすっかり変えるしかないのだと。ではその「仕組みを変える」にはどうしたらいいのか。それは結局のところ、一人ひとりがより環境を、自然を、命を大切にするということにかかっています。そこで、森びとは、より自然とのふれ合いが少ない大都市・東京で、自然に触れるゼミを開催することにしました。

園内にある倒れたイヌザクラ

■山でも都会でも木を植える

私たち森びとは、足尾や八幡平・南相馬で、山と心に木を植える活動を行ってきました。そこで学んだことや経験したことを踏まえて、都会でも木を植える事業を進めていきます。幸い私たちの事務所の近くには、東京ドーム 4 個分という広い自然林が残された国立科学博物館付属自然教育園があります。そこを実際に自然と触れ合うフィールドとして、私たちが「森に生かされている」ことを実感できるような、そんなゼミを企画していく予定です。

運営委員　小黒伸也

■森びと「どんぐりゼミ」概要■

日程：年 4 回（4 月･7 月･10 月･1 月）
※2022 年は 7 月から開催
時間：13 時～17 時
対象者：会員と「目黒さつきビル」周辺の住民
定員：各会 20 名
参加費：500 円（資料代）
テーマ（目的）：
・森との人との関係を深く認識する
・森に生かされていることに気づく
・気候変動の問題をより身近に感じる
主催：森びとプロジェクト

※詳細は決まり次第ホームページ上で告知いたします。

新事業

今年から、「りんねの森づくり」を始めます

私たちは、足尾銅山周辺の荒廃地で人間が自然を破壊し、生きる糧を奪い、ふるさとを失ってしまった悔しく悲しい歴史を繰り返さないようにと、その荒廃地に木を植えています。心ある皆さんが拠出してくれた時間・費用、そして植林ボランティアの努力、それをサポートしてくれている古河機械金属(株)様と、中央・地方の行政の力などによって、木々は生態系豊かな森を形成しつつあります。

70 年以上つづく森づくりは現在でも継続中ですが、足尾の煙害地には草木が生きられない地が残っています。その岩や石だらけの足元を見ると、地衣類、苔が一生懸命にいのちのタスキを草木にバトンタッチしている様子が観察できます。足尾の現場に立つと、この地衣類や苔の何万年に渡る活動があって、私たちの森づくり土台ができてきたことが実感できます。

人間の森づくり知識や技術を受け入れてくれる土台はどのようなプロセスなのか、この植物遷移の一端が感じられるように願って、今年は木を植えていきます。世界の多くの方々は、気候変動による想定外の気象現象、新型コロナウイルス感染の猛威等に向き合うことを余儀なくされている気がします。そんな気持ちを活動に反映した森づくりの名を「りんねの森づくり」として、春からその準備を行い、初夏に木を植えていきます。皆様のご理解とアドバイス、ご協力をお願いします。

最後に、新植樹地を提供して頂きました古河機械金属（株）様にあらためて感謝を申し上げます。また、この森づくりは公益財団法人イオン環境財団の助成金で進められています。

運営委員　大野昭彦

■りんねの森づくり 概要■

植樹面積は約 1,762.3 ㎡（下記写真を参照）。運営委員、森づくりチームスタッフ、サポーター、協力者によるチームが苗木を植え、育て、観察していきます。

○砂地チーム地図 1

大小の石が堆積している地にパイオニア種を植えます。

○土壌改良チーム地図 2

赤土と砂混じり地に黒土を混ぜ、落葉広葉樹を植えます。

○赤土チーム地図 3

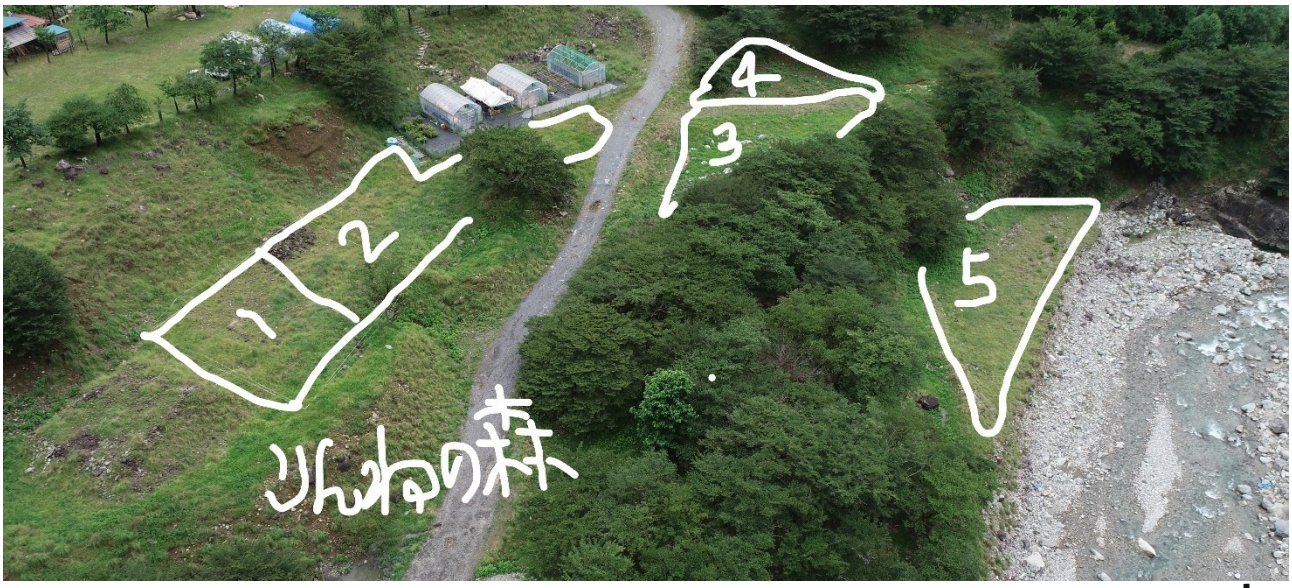
草だけが生えている地。土は赤土、このままの土壌にふるさとの木を植えます。

○湿地チーム地図 4

雨水などが流れ落ち、雨に運ばれた土砂が堆積した窪地。水分の多い土地に生える木を植えます。

○河川敷チーム地図 5

松木川の北側の岸辺。大雨毎に削られる川岸に砂や石が堆積している地にヤナギ等を植えます。



森と暮らす私の知恵

日常の生活に活かす"森と暮らす心得"

東京都に住んでいると森と人間の関係等を考える時間は少ない。その機会を与えてくれるのが、四季毎に届く『森の木魂』である。1 月に届いたその記事では、森びと県ファンクラブの生き生きとした活動が語られていた。そこには、発足以来の故宮脇昭先生、故岸井成格さんの人間性あふれる温かい指導が息づいていると思った。

COP26 のグラスゴー合意は、先進国と途上国の対立が浮き彫りになり、議長が涙を流して閉会したように土壇場で「化石燃料の廃止から削減に」修正された。日本政府はこの場において CO2 削減に積極的な姿勢を示さなかった。そんな寂しく不安な社会の中で提案されていた、今年度から始まる「森の友だち探し」（仮称）という活動は、足尾の森と東京都内の森を案内してくれるというから、森と人間の関係を考えるうえでは素晴らしいことだと思う。時間を空けて参加してみたい。

通信第 5 号は、アメリカ国籍のカエル・ダントさんが中倉山の 1 本のブナ保護に携わった感想を紹介していた。さらに、ミシガン大学の学生・エミリーさんを取材した運営委員・太宰さんによる、学生たちの国政選挙の取り組み状況が報告されていた。「崖のところに独りで立ち続けるブナに何らかの力になれたことが嬉しい。」というカエルさんの森への思いに感動した。また、ミシガン大学生たちが「政治と環境、そして自分たちにできる事と社会に求めていくというハッキリとした強い思いが溢れている様子を伺うことができました。」との報告で、日本の若者に現われている政治離れの問題として考えさせられた。

「足尾銅山労働者の生活を支えた森づくり」は読み応えがあった。『種が流れる』というドキュメントを観た時の橋倉さんの衝撃、一度壊した森を再生する森づくりは中途半端な気持ちではできない。森づくりの成功の陰には、木が育つ過酷な土壌づくに汗した女性達の労働が存在していたことを忘れてはなりません、と書かれていた。私は『種が流れる』を観たことはありませんが、改めて筆者の森づくり取り組む真摯な姿勢に心が打たれた。

東京都の計画では、外苑再開発エリアにある約 1,900 本の半数以上の約 1,000 本が伐採されるとのことだ。この中には樹齢 100 年級のクスノキやケヤキなどの大木も含まれている。2 月 7 日、文化遺産保護の提案などの提言などを行う「日本イコモス国内委員会」は東京都に見直しを提言した。その後、小池都知事は都議会で「既存の樹木を極力保存、移植する」と述べたが、これまでの都知事の言動をみるとこの発言は信用できない。

小池都知事はノーベル平和賞・ワンガリー・マータイさんの活動を忘れてはならない。今、人間の行為による環境破壊は世界の各地で引き起こされている。その最たるものが戦争。ロシアのプーチン大統領によるウクライナへの侵略攻撃は許されない野蛮な行為である。

東京都会員　奈良剛吉

森と暮らす私の知恵

周囲が伐採され残ったブナ

大雨や木々の悲鳴に鐘を鳴らし続けていきたい

2019 年 10 月、台風 19 号によって私の住む栃木県佐野市も大きな被害を受けました。普段水量の少ない市内を流れる河川が氾濫し、多くの世帯が床上浸水等の被害にあい、隣の足利市では避難途中に車が水没し 1 名が亡くなっています。発災後、私も泥出し等ボランティア活動に参加しましたが、被災した市民の多くが「まさか佐野でこんな災害が起こるとは」と驚いていました。

市内を流れる最大の河川は渡良瀬川です。森びとプロジェクトの活動拠点の一つ足尾山域に源流をもつ一級河川です。19 号台風の時の水位は上昇しましたが氾濫は免れました。

近年防災との関係で「流域治水」が議論されるようになっています。「流域治水」とは、河川流域全体のあらゆる関係者が協働して水害を軽減させる治水対策です。山林の荒廃、保水力の復元も大きな課題です。私は森びとプロジェクトによる足尾での森づくりは、渡良瀬川下流域で生活する私たちの命と財産を守る流域治水でもあると考えています。長年にわたり水源山域で森づくりにご尽力されてきた皆さんにあらためて御礼申し上げます。

私は冬の期間、地元で里山を所有する友人と間伐作業を行ってきました。19 号台風以降、間伐も「流域治水」の一環と位置づけ災害ボランティア仲間にも声をかけ、この冬はのべ 70 人以上が参加していただきました。このような活動を通して、山林のもつ多面的な機能や気候変動に対する関心が広がればと考えています。

いま私が最も危惧している環境問題は、リニア中央新幹線建設工事です。リニアには様々な問題が指摘されていますが、各地で工事が強行されています。南アルプストンネル工区の長野県側にある大鹿村では、リニアに電力を送るため送電施設工事が行われています。この工事にともなって送電ルート上の木が大量に伐採されています。そのなかに樹齢 300 年を超えるブナの巨木が 2 本あります。地元の有志が伐採に反対し、署名活動等に取り組んでいました。昨年ブナ 2 本は伐採を免れましたが、周囲の木は伐採されてしまいました。

昨年 11 月、私は無残に伐採された斜面に立つブナを見に行きました。長年共生していた周囲の樹木がなくなり樹勢の衰えが心配です。地元で反対運動に取り組んでいる酪農家を訪問し、昨年参加させていただいた足尾の孤高のブナ保護活動を紹介しました。その際、酪農家からポスターを預かりました。大鹿村のブナのことも、森びと関係者の皆さんに知っていただきたいと思います。

足尾のブナと大鹿のブナには共通する背景があると思っています。時代は違えども、人間の経済活動によって孤立を強いられた点です。保護活動の経験交流など何らかの連帯ができれば、人間に深い警鐘を鳴らすことになるのではないでしょうか。

栃木県会員　山内健人

森と暮らす私の知恵

生存を危機に陥れる紛争や気候危機と向き合う生活

久しぶりに太陽の陽が射す 2 月下旬の休日、『森の木魂』5 号の清水卓さんのページを読んだ感想を投稿しようとしていましたが、シェルターに逃げ込んだウクライナの幼い少女の「戦争はいやだよー。死にたくないよー。」と涙ながら訴える悲痛な声が頭から消えません。目頭も熱くなり、自分がその立場にいたらと思うと胸が締め付けられる思いでした。助かってほしいと願うばかりでした。

ロシア軍のウクライナ侵攻、子供騙しのようなプーチンの言い訳。一握りのリーダーの判断が一瞬にして他国民を犠牲にしている様子はやりきれませんが、そのリーダーを選択したのもロシア国民です。政治への無関心は禁物であり、市民の抵抗は生活の一部であることを胆に銘じています。

『イラク戦争と地球温暖化』と題し、イラク戦争による地球温暖化への影響を定量的に考察した貴重な報告書が公開されています。そこでは、全世界から排出されている温室効果ガスの約 0.1%相当の量がイラク戦争では排出されていたそうです。さらには、現在から 2030 年までに全世界で必要とされる再生可能な発電への投資額のすべてをカバーできるほどの金額がイラク戦争に投入されたと言われています。紛争、戦争は最大の環境破壊行為であり、人類の生存を脅かしている犯罪と言わざるをえません。

私たち市民だけでは戦争や環境破壊をなくすことはできないので、気持ちはモヤモヤして悔しい日々が続いています。だから、私は、いま自分ができることをやるしかないという立場を堅持しています。現在、秋田市市議会で「脱炭素宣言」を議決させるべき請願書提出の取り組みをしています。お付き合いのある市議会議員のお力沿いもあり、今年 6 月の定例議会に提出する方向で準備をしています。これをきっかけにして、各地区の森びと会員と連携しながらこの請願書を各自治体へ拡げていければと考えています。この過程では、秋田県内の脱炭素社会に向けて活動している市民や団体との連携をつくり出したいと思っています。

自然界の様々な働きの中で生きている私たちですが、今年冬の豪雪を体験した私にとっては気候変動が生存を脅かしていることを身近に感じています。私にできることは、子や孫たちの持続的な生存ができる地球環境を少しでも健全にしていくことだと思っています。

この気持ちを地域のシニア世代に呼びかけて、政府や地方自治体の脱炭素社会を深掘りし、私たちの声を自治体へ反映させていきたいと願っています。

秋田県会員　大山博延

（写真）左上：フクジュソウ
右下：ユキワリイチゲ

生物社会に生きる心得

今号から「生物社会に生きる心得」というシリーズを掲載します。難しそうなテーマですが、世界各国が「脱炭素社会」へ移行しようとしている中で、市民として傍観していられないテーマではないかと思い発信していきます。これからもこの地球で生きていくことを第一にして、生物社会の一員である人間という現実から、これからの人間社会を見つめていきたいと思います。森づくり活動から習得した生物社会と人間の関係を会員の皆さんに提起し、皆さんとの誌上討論を交えて、「脱炭素社会」づくりに忘れてはならない森と生きる心得を探し当てられることを願っています。(広報チーム)

生物社会での人間の位置を知る

撮影：宙ガール林子

この文章を書いている途中の 3 月 11 日、11 年前の 14 時 46 分、私は森びと東京事務所にいました。経験したことのない揺れを感じた地震に驚き、事務所入口のドアを開けたままにして外に逃げました。この「東日本大震災・フクシマ原発事故」では、"津波と放射能からは逃げること、その脅威が鎮まることを待ちながら支え合って耐えること、その後は生存可能な対策を講じる"ということを体験しました。また、世界一のコンクリート堤防が壊されたほどの津波が襲ってくるという自然の脅威は計り知れないこと、原発施設もその延長線上にあり、原発に頼っている生活スタイルは私たちの生存を永遠に脅かすということを考えさせられました。

今、世界中には気候変動で住居を失っている「気候難民」が 2 千万人もいると言われています。さらに、各国では台風の巨大化、干ばつ、熱波、局地的豪雨や豪雪が頻繁に発生し、市民の生活を脅かしています。2 年前からは、新型コロナウイルスは世界で 6 百万人以上の命を奪い、グローバル市場経済活動をも停滞させています。私たち市民は科学者の英知に頼りつつ、我慢と自粛の生活に耐えながらウイルスの猛威が収まることを待ち、温暖化による気候危機に向き合い、「脱炭素社会」づくりに向かっていかなければならないようです。

"待ったなし"で生存基盤を健全にしなければならない時期に、プーチン大統領はロシア軍をウクライナへ侵攻させる暴挙にでて、原発施設をも砲撃して人々の生存を脅かしています。この暴挙は絶対に許すことはできませんし、戦争は即中止すべきです。

私たちが心身を維持・発展させ、子孫を残していくための源泉は人間の労働と自然資源ではないかと思います。この生存活動は目的意識的に行いますが、自然の法則に逆らった人間だけに都合の良い生活スタイルを続けると、私たちの生存は不安定になってしまうようです。

顧問　高橋佳夫

県ファンクラブ通信

シニア世代の活動が飛躍できるファンクラブへ再出発

ロシア軍のウクライナ侵略のニュースを見る度に、私の気持ちは暗くなり、戦争している国々の首脳への怒りが止みません。また、戦争反対と叫ぶだけの自分を情けなく感じます。

嘆いていても地球温暖化による気候危機は止まりませんので、県内に住むシニア世代との話し合いの場をつくっています。呼びかけたのは現役時代に八幡平市の松尾銅山跡地の森づくり、足尾銅山跡地の森づくり、そして南相馬市の「鎮魂復興市民植樹祭」に参加したシニア世代です。

話し合いでは、その当時の森づくりの苦労、楽しかった思い出が多く出されましたが、この話が身近に起きている異常気象と関連し、それは政治に深く関係していることの話に発展すると、「ようやく眠りから目覚めるキッカケができた」等との意見になり、現役当時に学んだ事を何かに活かしていかなければという気持ちが生まれました。

昨年、私たちは、「2050 年までに温室効果ガス排出ゼロ」への請願書を福島県議会に提出し、議会では全会一致で採択されました。県議会としての今後の動向を期待しています。この活動でお世話になった県議会議員との意見交換を機に、今後の取り組みに弾みをつけられるのではないかと思っています。さらに、アクションを起こしたことで県ファンクラブの仲間達の自信につながりました。

やらなくてはならないことは沢山ありますが、全てのはじまりである「"生存"が不安定になってしまう地球にさせないため」を第一に考え、地域でつくりだせる活動をすすめていくことを話し合っています。3 月から 4 月にかけては、ファンクラブの規約を一部改正し、役員体制の補強のための準備をしています。臨時総会は、4 月 23 日に予定し、シニア世代が活動できる組織体制を改め、この日が、当クラブ飛躍のスタートにしていければと思います。

各県ファンクラブの皆さんの温かいエールをお待ちしています。

森びと福島県ファンクラブ代表　東城敏男

第 10 回南相馬市鎮魂復興市民植樹祭のお知らせ

今年の「鎮魂復興市民植樹祭」は下記の通りに開催される予定です。新型コロナ感染拡大状況によっては、開催内容が変更されます。詳細は、後ほど公開される南相馬市のホームページをご覧ください。

★開催日　2022 年 6 月 5 日（日）・12 時から 15 時までの予定。
★会場　南相馬市小高区塚原地区予定。
★規模　2,000 人で 20,000 本植樹予定。

当ファンクラブは前段の準備をサポートする予定です。当日は皆さんとお会いできることを楽しみにしています。

心のふるさと探し

"山は生きている"　足尾銅山労働者の心を支え

少子高齢化の地域は日本各地に広がっていますが、買い物、医療など日常生活の不便さに耐えて生活することを実感している私です。そんな時に有難く感じることは地域住民の「助け合い」の精神です。私の住む足尾銅山の歴史には全国の鉱山労働者が運営していた「友子制度」という助け合いがありました。

ひと言でいうと、江戸末期から昭和 10 年代までの間の鉱山の坑夫たちが創った仲間組織で、組織は親分子分という徒弟制度を基礎に、坑夫の技能養成、相互扶助（病気、死亡など）をおこなっていました。

改めて、「友子制度」を調べてみましたが、銅山で働いていた方からの生々しい状況を探しました。そんな時、足尾在住の坑夫経験者であった渡辺恒雄さんと出会いすることができました。渡辺さんは年齢 86 歳、父親、兄、弟も足尾銅山の作業に従事していた鉱夫家族の一人でした。

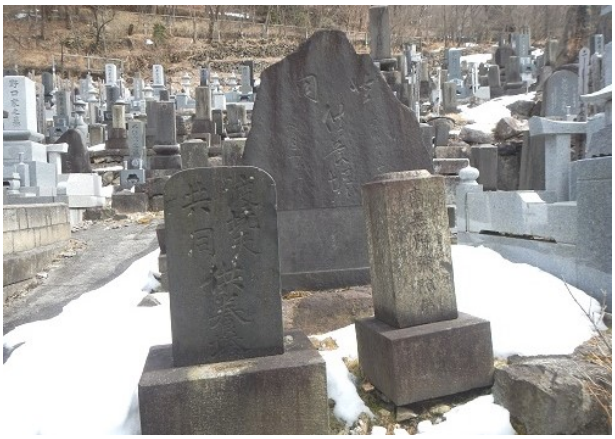
渡辺さんの当時の仕事は、落盤事故などが起きない坑道を保守する仕事を担当した「支柱夫」に就いていました。「友子制度」に関してうかがうと、渡辺さんが働いていた頃にはその制度は無かったそうです。

ところが坑夫の労働環境はとても劣悪で、自然のパワーから自分の命を守ることが何よりも大事だったそうです。渡辺さんも坑道の"浮石"点検中に、落盤事故に遭い、ヘルメットが押しつぶされ、腰の骨と肋骨が折れ、意識が遠いた経験をしたと言っていました。地面と崩れた土石の僅かな隙間で命が救われたそうです。銅山現場では酸欠や転落など死に直結する事故、粉塵（石英）による「珪肺」で亡くなる人が続出していたようです。このようなリアルな話を聞いていると、江戸末期から明治、大正時代の銅山労働現場は命がけの労働であったと思います。

命がけの鉱山労働であっても、足尾銅山には全国から労働者が集まり、少しでも豊かな生活を求めていたようです。その生活の中から感じられたことは、渡辺さんが話してくれた「山は生きている」、「山が全体重をかけて穴を塞ごうとするから、支柱を入れて対抗するのだ」という自然界のパワーと向き合う坑夫の心が「友子制度」に結実したのではないかと思いました。

長い時間をかけて森が育てた自然(天然)資源に働きかけて生きた坑夫の生きる知恵は、いつの時代にも遺しておかなければならないと思いました。渡辺さんが命がけで感じ取った「山は生きている」という言葉は、森に寄り添って生きる私の心得にしたいと思っています。

森づくりサポーター　橋倉喜一



共同の供養塔

森は友だち

12 年前、母島の森を探訪した。島の一部の森にはアカギという木が森を占有していた。ガイドに訊いてみると、戦時中に鰹節作りが盛んになり、鰹を燻すための薪用に、比較的生長の早いアカギを植林し、終戦後、鰹節生産が萎むとアカギは放置された、と言っていた。

南房総地域では海苔作り用に比較的に真っ直ぐに生長するマテバシイが重宝され、植えた。今では、そのマテバシイがその地域の山を占有している。2019 年の上陸した台風 19 号上陸では、この一帯のマテバシイが根元から倒木し、陽射しが射しこむ地には草花や木々の実生が顔をだしたという。

一種類の木が山を占有すると、その木はいざという時には全滅する恐れがある。大量発生したサバクトビバッタが農作物を食べつくすように、菌、バクテリア、昆虫が木に攻撃をかけると、一気に全滅してしまうこともある。生物社会には多様な生きものが生存しているので、一種類の木が衰弱すると他の植物が生物社会を護る働きをするという。木々が放つ物質が菌や昆虫等を遠ざけるように、木に寄り添って生きる生物が社会の衰退を護る。

人間社会も多様な価値観をもった人間が存在している以上、全ての欲望を満たそうとすれば、ロシア軍のウクライナ侵攻という悲惨な事態になってしまう。生物社会の一員である人間の社会でも、生存していくためには「競争しながら、多少嫌なやつとも我慢しながらともに生きていく」ことが社会の基本ではないか。「民主主義 VS 専制主義」という単純な対立では、本当の世界平和が遠ざかっていくのではないかと不安である。（顧問　高橋佳夫）

編集後記

「チェルノーゼム」という豊かな土があることを知ったのは、比較的最近のことです。「土 地球最後のナゾ　100 億人を養う土壌を求めて（藤井一至）」という本を読んで得た知識でした。腐食と粘土と砂をバランスよく含み、中性の性質を持つズシリと重い土。この地球上でもっとも肥沃とされ「土の皇帝」と称されているほどなのだとか。

何の根拠もなく日本の森林土壌が No.1 だと思いこんでいた私には、これまた何の理由もなく少しショックを受けたのを覚えています。そしてまた、その豊かな土を生んだ、ウクライナという土地をぜひ訪れてみたいと思ったものでした。

3 月 26 日のシンポジウムでは、顧問の山崎さんから、「平和が訪れたウクライナに木を植えに行こう！」という趣旨の提案があり、思わず膝を打ちました。ぜひとも実現したいですね。豊かな大地を持つウクライナが、文字通り豊かな国に戻ることを祈念してやみません。

この号が出る頃には争いに一段落が付き、平和が訪れていることを心から願っています。「ひまわりがいまかいまかと平和待つ」（広報　小黒伸也）

森の木魂（こだま）第 6 号（2022 年 4 月 24 日発行）
発行：森びとプロジェクト
発行人：中村幸人
編集人：森びとプロジェクト編集委員
第一版

〒141-0031
東京都品川区西五反田 3-2-13 303 号室
TEL&FAX 03-6417-3750
http://www.moribito.info/
Email info@moribito.info